説教20210207　士師記６：１９－２４　ルカ５：１－１１

２３９　　　21-２９０（２番）　２４３　　 「驚くべき主のみもとへ」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

選ばれるとはどういうことでしょうか。神から選ばれ、漁師たちは「人間をとる漁師」にされました。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」というイエス様の言葉がヨハネ福音書に記されています。

又ルターたちは、神の選びというのは神の自由意志によるもので、選ばれる側の資格や能力に関係ない、という神の選びの教理を述べました。

なんだか、分かったような分からないような、気になります。神は選びたい人を選ばれ、愛されたい人を愛されるというわけですが、そのように言われると、神様なんと不公平なんですか、しかも私たちがいくら努力してもそれは報われないんですね、という思いにさせられるかもしれません。

今日はそこのところに焦点を当ててお語りしたいと思います。今日の聖書箇所には群衆と漁師たちとが出てまいります。両者は対照的に描かれています。一言で申せば、群衆はイエス様から選ばれたい人であり、漁師はイエス様に選ばれた人でした。群衆は自分こそ選ばれたいと思って、イエス様を探し回って追いかけたのですが、結局イエス様は彼らから離れられます。一方、漁師たちは、最初から全く選ばれたいなどという気持ちは一切ありません。彼らは群衆が周りに押し寄せてきたときも、ただひたすら網を洗っていたのでした。しかし彼らはイエス様との問答と出来事を通して最後にはイエス様に従う者とされたのでした。つまり、群衆はイエス様から選ばれたい人であり、漁師はイエス様に選ばれた人だったのです。

このことを黙想してまいりますと、両者を分けたのは、一つには、自分が選ばれたいという気持ちを持っていたか、いなかったかという事にいきつくように思われます。群衆は自分が選ばれたいという気持ちを持っていたばかりに、それゆえにイエス様から選ばれなかったのです。

この自分が選ばれたいというメンタリティーは、今を生きる現代人のそれと大変似通っています。私たちは今のこの世で自分こそ選ばれたいというメンタリティーを根底に持っています。それは１０代のころから様々な形で、私たちの内に習得されて醸成されていくでしょう。ある人は希望の高校の一員として選ばれたい。又ある人は所属する野球チームのレギュラーとして選ばれたいなどと強く願っていることでしょう。私たち現代人はこのように多かれ少なかれ、いわば選ばれたい願望に縛られた生活をしていることでしょう。今日の聖書箇所の漁師たちのように、全く選ばれたい願望を抱かずに、ひたすら暮らしている人は今の世の中では数少ないのではないでしょうか。

逆に、今日の聖書箇所の群衆は、今の私たちの先鞭をつける存在のように思われます。良くも悪くも、この群衆と今の私たちにはとても似たところがあります。

では、このように私たちを縛っている選ばれたい願望を、一度見直して、捨て去ることが出来れば、私たちは神から選ばれるという事、神の選びの教説に首をかしげることもなくなるのではないでしょうか。神は選びたい人を選ばれ、愛されたい人を愛されるんだなー、と素直に納得できるのではないでしょうか。

さて今日は、士師記という旧約聖書も読まれましたが、では、旧約聖書の時代の群衆はどうだったかかといいますと、彼らは、この選ばれたい願望は持っていなかったように見受けられます。彼らは自分を選んでくださいと言って主なる神のところに押しかけなかった代わりに、何をしたかというと、神ならぬ神、つまりバール神のところへと偶像崇拝をしにどっと押し寄せたのでした。と言いますのも、旧約の時代、今日のギデオンが神から選ばれた今日の話からも分かりますように、人が主なる神から選ばれて、神と顔と顔とを合わせて神を見るという出来事は、死をもたらすことと考えられていました。ですから、イエス様の時代のように安易に神を追いかけるという事は群衆にはできませんでした。その代わりに、主なる神のような恐ろしい全知全能の神ではなく、もっととっつきやすい安易なバール神のほうへと彼らは引き寄せられていったのでした。

全知全能の恐ろしい驚くべき主なる神が、イエス様となられて人となって、私たちのところに降って来られてから、私たちは、今日の新約の群衆たちと同じように、イエス様を近くに探し求めることが出来るようにされました。しかし、ここで注意しなければならないことは、私たちがイエス様を探し求めるとき、決して自分の内に選ばれたい願望を抱かないという事が大事です。とは言え私たち人間の弱い心は、常にその願望から自由ではないでしょう。イエス様はそのような私たちの弱さも十分ご存じであります。ですから私たちは、ここは素直に、神は選びたい人を選ばれ、愛されたい人を愛されるという言葉を信じそれに従っていこうではありませんか。

では漁師たちが、イエス様からえらばれたことの次第を、聖書箇所からみてまいりましょう。先ほども申し上げました通り、イエス様がゲネサレト湖畔に立っておられたとき、群衆たちはその周りに押し寄せてきました。漁師たちは恐らくその様子をハタから見ながら、その網を洗う手を休めることはなかったことでありましょう。ここでイエス様と漁師たちとの間に交流が生まれます。イエス様は押し寄せる群衆から一定の距離を保つために、漁師たちの船に着目されました。そしてその船を使って、岸から少し離れたところから教えられるように、漁師たちに船で岸から少し漕ぎ出すようにとお頼みになられたのでした。漁師たちは、このときイエス様に対して、選ばれたい願望はもとより、たいした興味も抱いてはいないかの様です。イエス様のことをただ、周りを騒がしている有名な先生位に思っていたのではないでしょうか。ですから、そのイエス様のお頼みを、他意なく素直に聞き入れたのです。ここまでの成り行きで、イエス様と漁師たちの交流が、人間的に始まったことが私たちに知らされます。しかし４節のシモンに対するイエス様の言葉「沖に漕ぎ出して網を下ろし、漁をしなさい」というみ言葉は、沖から漕ぎ出せ、というお頼みの時のようには、シモンは素直に受け入れることが得来ませんでした。それは、シモンたちには自分たちが見てきた体験があったからです。つまり彼らは夜通し網を下ろして苦労して魚を取ろうとしましたが、一匹もとることが出来なかったのです。そして、釣りというのは、決まって明け方のころには成果が上がらなくなり、夜明けとともに釣りを終えるという事も彼らの常識でありましたから、イエス様に「沖に漕ぎ出して網を下ろし、漁をしなさい」と言われない限り、彼らが再度沖へ漕ぎ出すという事はあり得ないことでした。そして漁師たちはイエス様の言葉に従います。この時漁師たちはイエス様が神様であるなどとは思っていなかったでありましょう。「御言葉ですから網をおろしてみましょう」という言い方から推し量るしかないですが、おそらく彼らは、イエス様のことをみんなに評判の偉い先生位に思っていて、そしてダメ元で、まったく期待はしないで、船をこぎだしたのではないでしょうか。

ここまでのことの次第で、漁師たちはイエス様の内に人間性を見こそすれ、決して神性つまり神様を見てはいないという事が推し量れます。

しかしやがて彼らはイエス様の足元にひれ伏すようになり「主よ、わたしから離れて下さい。私は罪深い者なのです」と言うに至るのです。では、何が、彼らにイエス様が神様であることを悟らせたのでしょうか。それは、彼らがイエス様と交流していくうちに、自分たちの間で起こった驚くべき出来事の数々です。「おびただしい魚がかかり、網が破れそうになり、その魚を仲間を呼んで船に移し替えれば、その船が沈みそうになった、」という今迄に見たこともないような出来事が、イエス様と共に沸き起こり、それを実際この目にした、という事が、イエス様が神様であることを彼らに気づかせました。この時、漁師たちはギデオンのように、出会えば死に至る恐るべき驚くべき全知全能の神をイエス様の内に見出したのでした。

９節に「とれた魚にシモンも一緒にいた者もみな驚いたからである」とありますが、これは元のギリシャ語を直訳すれば、「魚が捕れたことで、驚きがシモンと共にいたすべての者をとりこにした」となります。驚きがシモンたちをとりこにした、驚きがその心を征服し支配したと言い換えることが出来るかもしれません。

はじめ無心に人間イエスと交流していた漁師たちはここにきて、このように驚くべき神にとらえられたのです。

さてここで冒頭からの神の選びというテーマに戻りますと、この漁師たちが驚くべき神にとらえられた、という事も、漁師たちが神から選ばれた、という事なのでありましょう。このように神から選ばれる、という事は、私たち人間が神を選ぶという事よりも、比べ物にならないくらい、驚くべき、恐るべき、そして永遠なる出来事です。

私たちが神を選んでついていっていると思っていることは実は、危ういことです。群衆のようにイエス様から何かいいことをしてもらえることを期待して、もしその願いがかなえられたとしても、それははかない出来事です。私たちの人生は次から次へその祈願と成就の内にはかなく過ぎ去っていくことでしょう。

それに較べ、驚くべき主なるイエスキリストに選ばれ、捉えられた漁師たちはどうでしょうか。彼らはイエス様にとらえられ変えられたのではないでしょうか。はじめ自分たちと同じ人間だと思っていたイエス様が実は、自分たちとはかけ離れた罪なき神聖な神様でもあることに気づかされたペトロは、主よ、わたしから離れてください、と言いました。

ペトロは罪深い我が身が、主なるイエス様と共にあることに耐えられなかったのです。しかし、そんな彼らに主イエスは「恐れることはない、今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と声をかけられ彼らを選ばれたのです。

罪のある私たち人間が、罪なき神から選ばれ、このように共に歩むものとされたのは、まったく人でもあり,

そして神でもある主イエス様によることです。主イエス様ご自身も、また父なる神から選ばれ、罪なき身に我々の罪を負って、私たちのところに降って来られました。罪ある私たちは、罪なきイエス様から選ばれ、そして永遠の祝福へ至ることが出来るように、ひたすらにその恵みの時を待ち望みたいと願います。

お祈りいたします

天の父なる神よ

私たちは、それぞれにあなたの姿を追いながら、今ここに集められています。その幸いに感謝し共にあなたを礼拝し賛美いたします。

時に、あなたの恐れ多さに自分自身に引きこもりたくなるような私たちを、あなたの言葉と御業によって変えてください。御子があなたに選ばれ、私たちの罪を背負って、今、共におられることを信じ、私たちもあなたに選ばれた幸いを覚えつつ、御国への道のりを、あなたに仕え、働く者としてください。

私たちが自分で思い描くはかない計画を、あなたのみ言葉によって清めてください。今嘆きの内に労苦する私たちが、やがてあなたのご計画によって、喜びかえって来られることを、み言葉によって確かなこととしてください。

今、病いの床にあって、あなたの慰めを必要とされる方々を覚えます。どうか全てをご存じのあなたが、全ての方々の苦しみの内にあって、それぞれの苦しみを取り除いてくださいますように。驚くべきあなたの身元にあって、常に主の平和の内を歩めるように守り導いてください。

又、私たちが一つの聖霊によって満たされ、病床にある兄弟姉妹たちを励まし喜ばせることが出来ますように、あなたのお導きを待ち望みます。

父と聖霊と共に一体であって代々に